



第一幕  
 昭和一九九年になると、戦争は次第に激しく  
 なり、三〇歳代や四〇歳代の男の人も戦地に  
 招集されて行きました。  
 家族や小さな子どもを残して出征していく  
 父親の姿も見受けられ、ほとんどの男性の仕  
 事は女性が代わってしました。

②

1/01

1/01

タイトル画  
 紙芝居のあらすじ  
 この物語は昭和二〇年の太平洋戦争末期が  
 舞台です。(八月一五日が終戦)  
 延岡市の孤島・島浦町に空襲があり、  
 児童生徒や島の人が銃撃で亡くなれました。  
 私たち日本人は終戦から七〇年以上も平和  
 で、戦争の経験が無く、世界中で戦争の悲劇  
 が起こっているのを見てもびんと来ません。  
 このお話は、この延岡で実際に起こった出来  
 事を知り

紙芝居にしました。

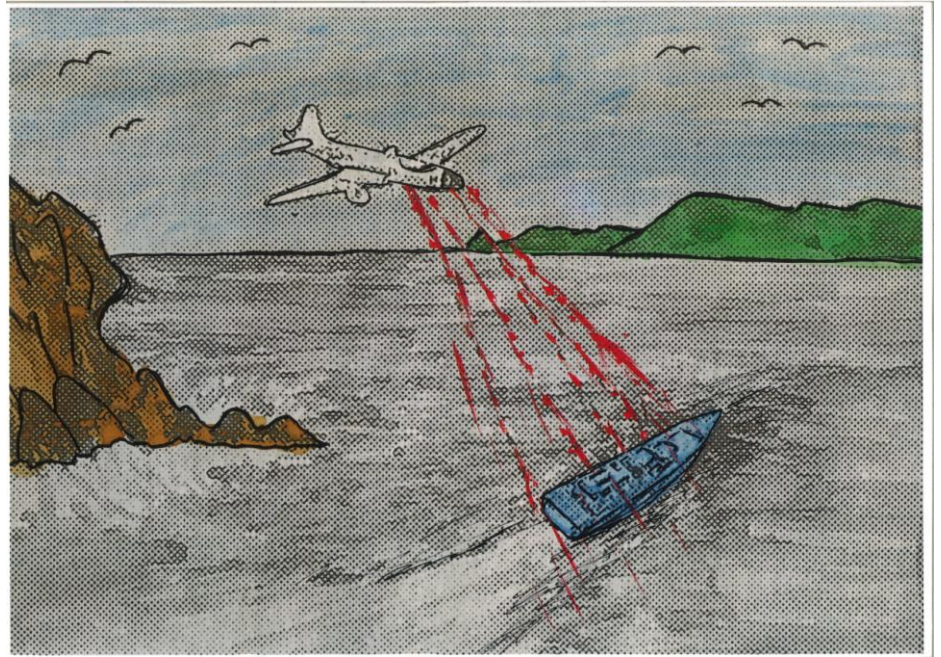
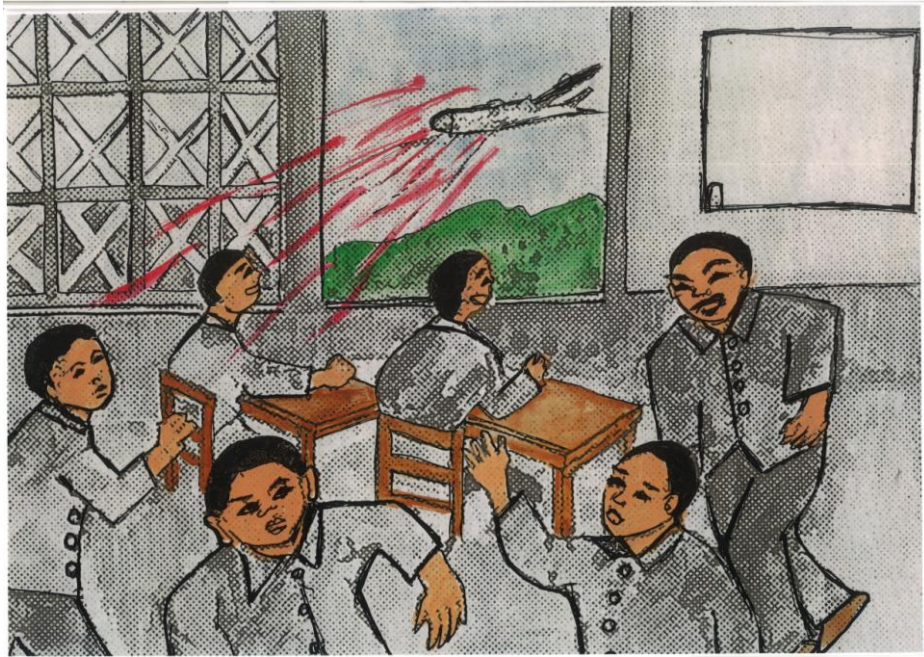


島物語

太平洋戦争末期 島野浦戦災記

原作・塩谷五月  
画・渡木真之  
リーダー・北国公子

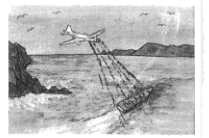
①



廊下へ走り出しました。

第三幕  
この日は小雨模様でした。島の港には日本海軍の監視船が停泊しており、アメリカ軍はこれを攻撃目標にしたようですが、近海や山にも爆弾を落としました。  
島野浦国民学校（小学校のこと）は朝の自習時間でしたが、突然のバリバリ・ッという激しい音にみんなが驚きました。  
「敵機来襲・空襲だ」と、叫ぶ声が出て、同時に教室中が慌てふためき、みんなが

4



第二幕  
昭和二〇年に入ると、私たちの郷土・延岡にも空襲が始まりました。  
五月二日は大師祭と招魂祭（しょうこんさい）という死者の霊を祀る日でした。島は祭

気分で、延岡まで演芸の出演者を迎えに行くために松福丸という漁船を出しました。  
ところが漁船が島野浦港を出るとすぐに、アメリカ軍のB17爆撃機がやってきて、船に機銃掃射しました。

3



第四幕

あつという間に、低空飛行のB17爆撃機が機銃掃射をしてきました。そのあまりの低さにアメリカ兵の機銃を撃つ姿が子どもの目にもよく見えたそうです。また、機銃のあとを引く赤い筋は、まるでトウガラシが飛んでいるようでした。

5



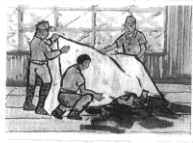
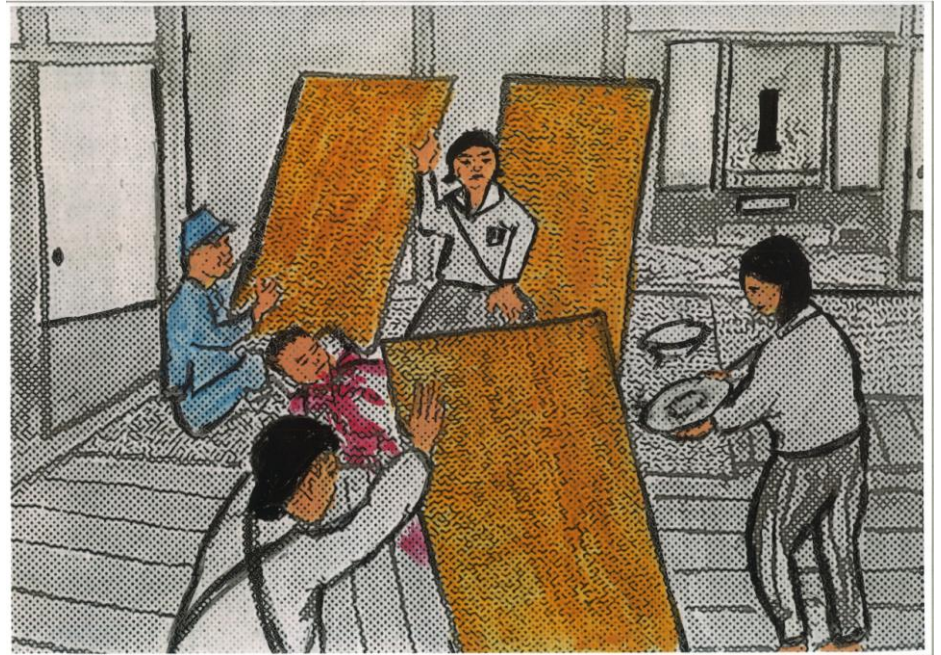
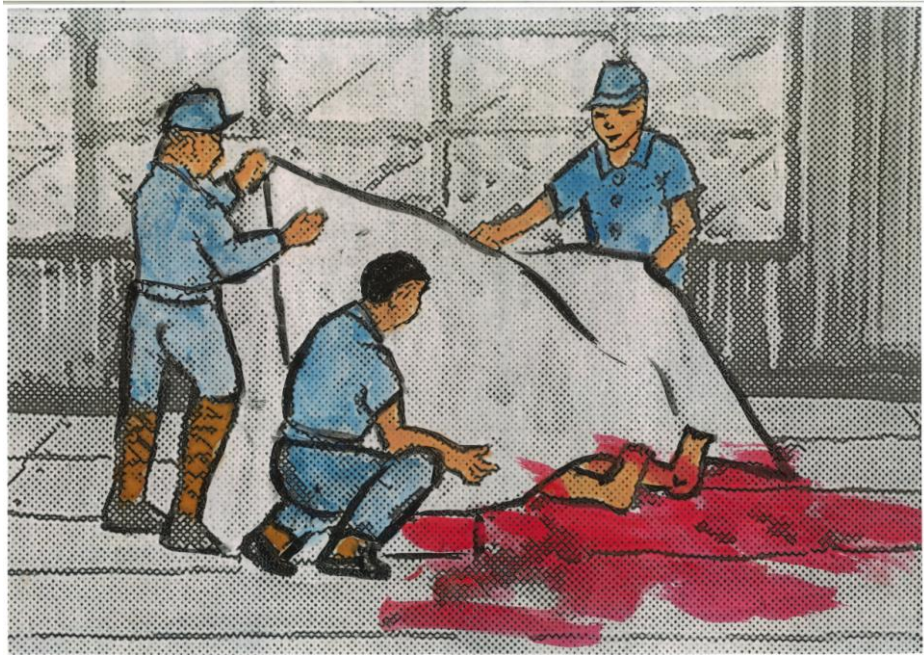
第五幕

校舎の中は、逃げまどう児童生徒で大変な騒ぎです。

長野龍勇君は親戚の年上の人に借りていた教科書と父親が出張先から買ってきてくれた傘を取りに引き返した時、米軍機が見えました。廊下の壁に身を寄せましたが壁を射貫いた弾が足に当たり目の前が真っ暗になりました。気がついて立ち上がろうとしましたが立ち上がれず、廊下を這って逃げました。それでも二段ばかりの階段を越えることが出来ないので自分の足を見ると右足は足首だけが残り、膝関節と足首までの間の肉はほとんどありませんでした。

戸板に載せられ黒瀬病院で足を切断されるまでの間、何度となく眠気がさし、夢を見ました。それは見たこともない夢で羊歯の藪を駆け落ちる夢でした。それがとても気持ちよく羊歯の上が布団のように感じられ、あと少しで落ちてしまいうようなとき、運んでいる人に「死ぬぞ!」と、言っただけで激しく叩き起こされ、目を覚ましました。

6



第七幕  
島田光代さんは、高等科一年生でとても明るい少女でした。  
前の晩、親戚の山本豊生君（トヨシキ）の家に遊びに行きました。楽しそうに柱をぐるぐるの回りながらふざけていた二人でしたが、二人ともついに帰らぬ人になってしまいました。  
光代さんは教室の入り口でうつぶせになって倒れていました。下半身に銃弾が炸裂して即死でした。

⑧



第六幕  
B17爆撃機の執拗な攻撃は、島野浦国民学校を機銃掃射しました。  
そのため、初等科六年の長野栄二君が両足を銃撃され、自宅へ運び込まれました。  
お母さんは瀕死の我が子を守ろうと、畳を上げて寝ている栄二君を囲み「撃つて来るなら来い。栄二と一緒に死んでやる」と、決死の覚悟でした。しかし栄二君は重傷で6時間後に出血多量で亡くなりました。

⑦



第九幕  
 女子消防団長の団長をしていた山本花子さんは防空監視の任務につく途中、銃弾が顔から後頭部を貫通して即死しました。  
 物資不足の中、反物や着物を買いたため、お嫁に行く日を夢見ていた花子さんでした。  
 家族は不憫に思い、花子お氣に入りました。高級な着物を柩に納めました。

第八幕  
 山本豊生君は高等科二年生でしたが、左胸貫通銃創の重傷を受けました。  
 初めは氣丈に「俺はやられた。この仇を討つてくれ」と、途切れ途切れの息で言っていました。おっかさん、だんだん暗くなってきた。もう、おっかさんの顔も見えなくなつた」と告げました。お母さんは「ほぅ、よゝい」と叫んでしがみつきましたが、それが最後でした。  
 富田連男君は豊生君と同じ高等科二年生でした。その日は週番長だったので三〇分早く登校して防火用の水溜に手押しポンプで水を入れていました。島中が祭で大賑わいの日で「はよ、雨がやんでくれりやいのゝ、学校も昼から休みじゃけん」と、同じ日直だった友人と話していました。  
 空襲警報も無く、半焼もならず不意打ちのように始まった銃弾音に耳を疑いながら、校舎の廊下を「待避、待避」と知らせて走り回っていたとき、ダダダダダーゴオーという凄まじい爆撃音をして、氣がつくと連男君が倒れていました。背中より左腹部貫通で即死した。





第一一幕  
 長野龍勇さんを覚えていますか？  
 足を切断することになった長野さんも義足  
 ながら立派に生活しています。  
 戦争で父親を亡くしたこの紙芝居の原作者  
 の塩谷五月さんも孤児として頑張って生きて  
 きました。  
 上級生や下級生の生々しい体験に接し、戦  
 争のむごたらしさや悲しみを二度と子孫に繰  
 り返させてはならないという思いから、体験  
 を後生に残すためにこの紙芝居を作りました。



第一〇幕  
 平和だった孤島、島野浦を襲った突然の悲  
 劇。  
 しかも子どもの通う学校を機銃掃射する  
 という人道を外れた行為に遺族は七〇年以上も  
 経過した今もやるせない思いです。  
 世界では今も紛争が続いています。日本は  
 平和だからと安心していてよいのか考える必  
 要がありそうです。